

第3回多治見市女性活躍会議 会議要旨

日時 平成27年8月26日(水) 午後3時～午後5時10分

場所 産業文化センター 3階中会議室

出席委員 加藤智子会長、谷口幸子副会長、伊藤静香委員、伊藤千里委員、
加藤裕子委員、木下貴子委員、高口さより委員、佐藤秀樹委員、
鈴木亜紀子委員、高木正典委員、土屋昭弘委員、水野隆夫委員

欠席委員 川上幸代委員

事務局 水野企画部長、桜井企画防災課長、伊藤課長代理、加藤主事

関係部局 暮らし人権課、子ども支援課、教育総務課、産業観光課、保健センター

ー以下会議録ー

1 加藤会長挨拶

昨日、岐阜県で同様の会に出たが、委員の年齢が高く、この会議と視点が違う。

前回、子育てについては大方のご意見をいただいた。

本日は最終回となるので、これから何をやっていきたいか、市長への提案を踏まえてご意見をいただきたい。

2 第2回会議要旨(案)の確認

3 今までの議論を踏まえた提案

【意見交換】

(1) 資料2について

- ・ 公開資料であれば、「元気な男の子」等それだけでは意味がわからない言葉は、もう少し補足した方がいい。
- ・ パートナーのところで、「休日は父親も家庭で過ごす」と言い切るのはどうか。子どもの手が離れたら、それぞれ好きなことをしたい。

(2) 資料3について

① 「共通認識」について

- ・ 「子育てはおとな全体が行うもの」は、子育てだけでなく、全てとする方がいい。
- ・ いろいろな年代、結婚していない女性も含め、全ての女性が輝ける対象とするべき。
- ・ 女性の負担が大きいのは子育て、介護、家事で、それを具体的に表現した方がいい。
- ・ 「子育て」に違和感を持つ女性はある。「家庭や地域」とした方がいい。
- ・ 子育てだけが女性の役割ではない。「ケア労働は女性が担うべき」という囚われがあることが問題である。「ケアする役割は社会全体で行うもの」とした方がいい。
- ・ 「子育てはおとな全体が行うもの」の項目に職場を加えてほしい。「子育てを職場全体で支える組織をつくる」という意味合いが入っているとよい。
- ・ 「地域で子どもを育てる」の前に「職場での理解」を入れてほしい。

- ・ 「キャリア形成に男女はない」は、女性には働き方を含め、生き方に様々な選択肢があることが表現できればよい。
 - ・ 子どもは女性しか産めないのも、子育てとキャリア形成に集約されることは仕方ない。
- ② 「阻害要因」について
- ・ 阻害要因には、女性自身のあきらめ、自信のなさがある。
 - ・ 岐阜県の女性はまじめでおとなしく、キャリアを積むことを望まない女性が多い。
 - ・ 地域や近所づきあいも阻害要因に入る。時間がない中での地域活動は苦しみになる。
 - ・ 「お金がない」「心身の疲労」「時間に余裕がない」のは女性のせいではない。社会構造に原因があることが分かるような書き方にすべき。
- ③ 「自らの行動」について
- ・ 「自らの行動」ではわかりにくい。「女性は勇気を持って一歩踏み出そう！」などの書き方がよい。
 - ・ 「活躍している女性を見る」、「意欲を持つ」を入れる。
- ④ 「行政・事業所・地域への期待」について
- ・ 保育士の収入が低く男性のなり手が少ない。介護士も含め、待遇や地位の向上をすべき。
 - ・ 活躍している女性の話を聞く機会を増やす。パイオニアの講演会や職業上のセミナーへ女性をもっと参加させるように事業所に働きかける。
 - ・ 日本人は周りに流される傾向にあるので、活躍している女性の事例をどんどん紹介するなど、市は啓発が必要。
 - ・ 子どもや若い女性がお手本にできるように、活躍する女性に接する機会を多く持てるようにしてほしい。そして、女性目線で参加しやすいものにしてほしい。
 - ・ 色々なタイプの女性の紹介をして、子どもたちが生き方を選べるといい。
 - ・ 行政は0歳から入園や入学までの間、どこにも所属していない子どもとその親へ、切れ目のない目配りや支援ができるとよい。
 - ・ 教育、保育を見直し、女性も男性と同じように活躍できる教育に力を入れてほしい。
 - ・ 働きたいけど働けない女性が、働けるような場所の提供。その中でもキャリアを積むことができるようになるといい。
 - ・ 広報で、介護・育児、多治見市内の事業所の情報などを発信できるといい。

(3) その他

① 「女性が輝く」について

- ・ 家庭の中では話し合いを持ち、男性は限られた時間の中で主体性を持って家事をする。その中で、キャリア志向で能力のある女性は活躍できる。
- ・ 職場の課長が45歳で出産し、時短で働いている。当初摩擦はあったが、各人が働き方、考え方、業務の必要性などを見直す機会になり良い影響がある。
- ・ 女性は昇進や新たなチャレンジを打診されたら、「できない」と言うのではなく、後進のため、周りの意識改革や今後のキャリア形成のために一度は受けてほしい。
- ・ 「女性が輝く」目的は、私生活か仕事なのかが曖昧である。ジェンダーバイアスは女性同士にもあり、女性対女性の方が大きい。

- ・ 家事中心、仕事中心、半々など、いろいろな場面での支援が受けられ、その人が望む生き方ができることが「輝く」ことだと思う。
- ・ 働くことだけが「女性が輝く」ことではない。地域で活躍できる女性も輝ける。
- ・ 0歳から高齢者まで輝けるまちづくりが、人口減少を食い止めることになる。
- ・ 「輝ける女性」をもっともっと増やしていくことが必要。
- ・ 「女性が輝く」には「時間」がキーワード。「やらなければならない」が「やりたいことができる」に変われば、時間を有効に使え、輝くことができるのではないか。
- ・ 先進国で出生率が上がっている国は、男女の賃金格差がなく、中立な社会システムになっている。そのような社会構造に改善しないと男女平等な社会にならず、女性の活躍は難しい。

② 家庭について

- ・ 全ての負担を女性が担うのは間違っている。夫婦で子育てをし、自分を育ててくれた親を相互で見るべき。
- ・ 共働きの場合、家事も双方が負担しないとやっていけない。若い人の意識は変わって来ているが、会社の上司には家事は女性という意識がまだ残っている。
- ・ 共働きになった時に、お互いが十分に働くために話し合うことで、お互いを尊重できる。結婚して最初に話し合うと、子育ての時も話し合うことができる。
- ・ 岐阜県は（家事などへの）男性の意識が低い。

③ 男性の意識について

- ・ 「男性は大黒柱」という認識が植えつけられている。
- ・ 男性は、「妻を助けてやろう」という心構えが必要。
- ・ 男性は「手伝う」という意識ではダメで、それに気づいていない。
- ・ 男性は保守的なので、意識改革が必要。
- ・ 男性が子育てに対して意識が変わる時は、自分の娘が出産した時と親の介護の時。

④ 書き方について

- ・ 資料3は、もう少し具体的な内容を入れた方が分かりやすい。
- ・ 対外的に（資料を）出していくのなら、バックグラウンドが分かる言葉の使い方に気を付けるべき。
- ・ 書き方によってイメージが変わり、違って捉えられる。万人に受け取れる書き方をしてほしい。

(4) これから必要なこと

① 事業所

- ・ 「ガラスの天井」を無くす等、職場を中心に持っていく方がよい。
- ・ 男性には「ガラスの地下室」という言葉がある。男性が独占している職種、稼げる仕事にも女性が就くことができるように、チャンスを平等にしていくべき。
- ・ キャリアに学歴は関係ない。体験した人の話は得るものがある。良い体験談などのセミナーや講演会へは、各企業から積極的に参加してほしい。
- ・ 「消滅可能性都市」という危機感の中で、女性と男性がどのように働いていけるか、企業の方向性の中で事業主が鍵を持っているのではないか。
- ・ 事業主は男女共同参画にも関心を持っていただき、連携を取れるようにしたい。

② 市

- ・ 「子育て」について、市は大きな意識改革が必要で、多治見市としてこういうあり方を応援していくという方向性があると良い。
- ・ 安心して子育てできる環境をつくるのが、行政として大事。
- ・ 教育のあり方や事例など、もっとみんなが知ることができるように PR する。
- ・ 女性は男性よりも選択の幅が狭いので、生き方の選択が狭められないよう、みんなの意識が変わるとよい。
- ・ 保育園は良い人材を採り、給料もきちんと出して、保育士の地位を高め、安心して預けられる、みんなが行きたいと思う施設にするべき。
- ・ 学童保育は、名古屋市の「トワイライト」のように、リタイヤした方々に遊びを教わるなど工夫をすれば、お金を掛けなくても充実させることができる。それが社会で子どもを育てるということにつながる。
- ・ 社会として男性の目線も変わってきているが、行政の後押しも必要。
- ・ 少子高齢化の時代、女性が妊娠しにくくなり、悩んでいる人が沢山いるので、不妊治療にお金を出してほしい。
- ・ 日本は人口が減っているが、欧州で女性の社会進出が進んでいる国は出生率が上がっている。ダイバーシティの推進なども含め、市は人口を増やす施策が必要。

③ 地域

- ・ 「地域活動へ参加する」のは大変。若い人が移住する際に田舎が嫌な理由は、地域でやるが多すぎるからとなっていた。
- ・ 人生は、職場、家庭、地域の3つがメイン。地域活動は時間を取られるだけ。
- ・ 近所づきあいは好きだが、地域活動はいろいろな行事があり、時間が取られ面倒。

④ 自分・家庭

- ・ 女性が自分のこととして、声を上げていく。
- ・ 女性も社会に育ててもらっているのだから、社会の一員として自分の能力を仕事、地域などへ還元するという意識を持つべき。
- ・ 子どもに対しては、家庭教育が一番の問題。家庭教育を良くするためには、男性は、「手伝う」のではなく、協力し合って子育てを行うこと。
- ・ 夫婦両方がお互いを尊重し、役割を決めていけばいい。

⑤ その他

- ・ シングルマザーの子どもが、他の子と同様に沢山の選択肢があるようになってほしい。
- ・ 地元に戻ってくる比率が3：7で女性の方が多い。女性は子育てを親元で行い、手伝ってもらいたいからだ。地元に残るのは娘の方が多いのでは。
- ・ 成功している男性は、仕事も家庭も充実しているイメージがあるが、女性が活躍しているのは、仕事か家庭を選択しなければいけないのはどうかと思う。
- ・ 雇用システム、社会システムが男性一人で家族を養う「男性稼ぎ主」を標準モデルとしていることが問題であり、女性の選択肢を狭めている。
- ・ 日本の両立支援政策は、ジェンダー不平等な支援策となっている事が問題である。男性に対しての両立支援も配偶者のある男性を働きやすくなるための支援であり、男性が家庭生活や地域生活を両立するためのものになっていない。

- ・ 「女性弁護士、女性役員など、女性 ― 」と言われないようにすることが最終目標。

4 その他

(1) 提案書の提出について

3回の議論のまとめとして、市長へ提案として提出する。